

屋号としての『満蒙』と満洲¹⁾への理解度

“ManMou” as A Trade Name & My Family’s Understanding of Manchuria

共同通信中国語グループデスク 高田 智之

Satoshi TAKATA, Editor Chinese Language News Desk Kyodo News

概要

『満蒙』という76年の歴史を持つ筆者の実家の老舗鮮魚店の屋号と、実家に保管されていた戦前の写真グラフなどを通して、内地の日本人として祖父と父が満洲（現・中国東北部）に対してどのような理解を得ていたかを考察した。一方、実家の店以外にも満洲にちなんだ屋号を持つ商店や旅館があることが分かり、それらの屋号の由来について経営者に聞いた。その結果、筆者の祖父や父を含め、彼らが満洲に対して繁栄、希望、懐古といったシンプルかつ独善的なイメージを抱いていたことが確認された。そのようなイメージは日本の傀儡国家・満洲国に代表される当時の満洲の実態とはかけ離れたものであるが、今日の尖閣諸島問題のような日中間の歴史認識の隔たりを理解する手掛かりを提供してくれる。

キーワード：満蒙、満洲、満洲国、満洲事変、日中戦争

Abstract

I was born and brought up at an old fish store called “ManMou”. The store has a history of 76 years. ManMou means Manchuria (Northeast China) and Mongolia, which the Japanese government coined and became generally used after the Russo-Japanese War. Recently, my family found in their home old magazines published in the early thirties. Most of the magazine photos depict the Japanese army invading Manchuria. Because of these magazines, I began to learn why my grandfather gave his store such a curious trade name, and to understand his and my father’s feelings about Manchuria. Aside from “ManMou”, even today, there are some stores related to Manchuria in Japan. The owners, including my grandfather and father, told me that the name “ManMou” conjures up images of prosperity, hope, or a yearning for the good old days of Manchuria. Such simple and complacent images are quite different from the truth of Man・Chu・Kuo, the so-called Japanese puppet state that represented Manchuria. These images of Manchuria can give us a clue to begin to understand the historical gap between Japan and China, especially per-

taining to issues such as the Senkaku Islands.

Keywords: ManMou, Manchuria, Man·chu·kuo, the Manchurian Incident, the Sino-Japanese war

目次

1. はじめに
2. 満蒙とは
3. 写真グラフが伝える満洲
 - 3.1 資料のリスト
 - 3.2 資料の内容
4. 満洲のイメージ
 - 4.1 祖父と父が抱いた満洲のイメージ
 - 4.2 満洲にちなんだ屋号
5. おわりに

1. はじめに

日本人の記憶の中に生き続ける満洲（現・中国東北部）とは何か。今なおさまざまな憶測と見解で語られる満洲だが、ここでは、屋号を『満蒙』と名付けて76年の歴史を持つ筆者の実家の老舗鮮魚店をとりあげ、実家から見つかった命名当時の写真グラフや書籍などの資料をもとに、祖父と父が満洲に対してどのような理解を得ていたかを考察する。同時に、実家の店以外に満洲にちなんだ屋号を持つ商店や



図1 “満蒙”の屋号を持つ実家の鮮魚店

旅館についても言及する。そうすることは、今日の尖閣諸島をめぐる領土問題についても、相手の怒りが歴史に根差したものであることを理解する一助にもなると考える。

2. 満蒙とは

満蒙とは南満洲と東部内蒙古を合わせた地域を指す日本側呼称である。日露戦争の結果、日本が南満洲に関東州（遼東半島の南西端）の租借権、南満洲鉄道の経営権などの権

益を獲得すると、その維持をめぐる『満洲問題』が提起されたが、1912（大正1）年の第3次日露協約で日本の勢力範囲が東部内蒙古へ拡張されたのに伴い、『満蒙』の語が一般に用いられるようになった（江口 2077 p.277）。満蒙を象徴的に満洲と呼ぶこともある。

3. 写真グラフが伝える満洲

3.1 資料のリスト

実家から見つかった満洲の地図と写真グラフ、書籍は次の通りである。

①『満洲時局地図』（満洲事変画報付録、大阪毎日新聞社、昭和6年12月7日発行）②『週刊朝日臨時増刊 上海事変写真画報 第二集 皇軍の江湾鎮占拠 朝日新聞社特派写真班撮影（本社機空輸）』（朝日新聞社発行、昭和7年3月20日発行）③『週刊朝日臨時増刊 熱河討伐写真画報 熱河征戦（〇〇部隊堂々進軍）朝日新聞社特派写真班撮影』（朝日新聞社発行、昭和8年3月7日発行）④『週刊朝日臨時増刊 熱河討伐写真画報 第二集 承德城壁上 皇軍の万歳 朝日新聞社特派写真班撮影』（朝日新聞社発行、昭和8年3月17日発行）⑤『週刊朝日臨時増刊 支那変乱の全貌 昨日の友は今日の敵（右蒋介石氏左張学良氏）』（朝日新聞社発行、昭和11年12月30日発行）⑥『アサヒグラフ 特集 支那戦線写真第十三報 涇源へ入城する山田部隊（九月十六日）支那事変戦勝記念』（朝日新聞社発行、昭和12年10月20日発行）⑦『問題の支那？』（後藤朝太郎著 立命館出版部、昭和8年7月12日初版発行、昭和11年11月15日十版発行）一の計7点。

これらの資料は一か所にまとめて保管されていた。いずれも裏表紙にそれぞれの資料を入手した年と共に「永久に保存すること」と筆で書かれ、父の署名がある。これは父が当時十代半ばであったことから、そのころの筆跡ではなく、後年、祖父の荷物を整理する際に記された可能性が高い。それらを歴史の教訓として保存しようと思いついたのかどうかは不明である。また、満洲や中国との戦争について記した祖父あるいは父の日記や文章はない。

②と⑤を除き、ほとんどが日本軍の中国での戦勝をたたえる記事と写真で埋められている。

3.2 資料の内容

①から⑦までの資料の内容は以下の通りである。①の地図については、若干の分析を加えた。

①の満洲時局地図は満洲事変の引き金となった1931（昭和6）年9月18日の柳条湖事件から2か月余りで発行されており、日本領朝鮮と満洲における『日本鉄道』『支那鉄道』『日本投資鉄道』『日本投資予定鉄道』『支那予定鉄道』の各線が描かれている。日本

鉄道は赤い色で描かれ、朝鮮半島南端の釜山、木浦からそれぞれ北方へ延び、一方は国境を越え中国側に入り奉天省撫順に到達。もう一つの日本鉄道は中国・遼東半島の旅順と大連を起点として北上し奉天（現・瀋陽）を経て吉林省長春まで延びている。奉天近郊には事件の現場、柳条湖がある。長春は翌年の満洲国建国後、新京と改称、同国の首都となった。南満洲は日露戦争後に日本の勢力下に入った。同地図では日本投資鉄道、日本投資予定鉄道が満洲北部の黒龍江省まで延びていることから、満洲全体を支配下に置こうする日本の意図がみてとれる。

事変発生直後に事変報道の取り締まり強化が内務省警保局長名で出され、同年12月末までに出された差止め処分、並びに差止め違反を理由とする新聞・雑誌の発売頒布禁止処分件数は、満鉄の延長、新線に関する宣伝（11月13日示達）については、11件（内川1991 p.34）となっていることから、この地図もその対象となった可能性がある。

②の上海事変写真画報は、満洲国樹立工作から列国の目をそらすため、1932（昭和7）年1月18日、買収した中国人に日本人僧侶を襲撃、殺傷させ、日中間の対立を激化させた上海事変（第一次）の勃発から停戦までの戦局を、写真と図解で説明している。米英などから「日本軍は無差別攻撃をする」と非難されたが、同画報では、「支那良民の保護」



図2 保管されていた写真集

とのキャプション付きで民衆が一か所に集められ、日本軍の保護下にある写真が掲載された。また『肉弾三勇士』特集もあり、「皇軍の花」「まさしく軍神」などの見出しが躍る。工兵隊の3人が鉄条網破壊のため爆薬を抱いて突入、生還に失敗し、爆死したが、陸軍がこれを覚悟の自爆であるとして、軍事美談に仕立て上げたものである。

③の熱河討伐写真画報は、国際連盟脱退後の1933（昭和8）年3月以降、日本軍（関東軍）の進攻が及んだ熱河省討伐は「東洋和平のために」と説明。満洲国宣撫班が「満洲国の建国は世界和平の第一歩」「祝全地域からの土匪掃討」「暗黒の生活は過ぎ去り、前途は光り輝く極楽」などと中国語で書かれた王道政治宣伝のポスターを背に、占領地区の住民に安心するよう説く写真や、「注目される資源」との見出しで、農畜産物、鉱産物が豊富であることを強調している。熱河省は蒙古族が多いことにも触れ、その風物写真も紹介している。同省に進攻した満洲国軍騎兵隊の行進や蒙古軍の少年隊の写真もある。いずれも日本軍と行動を共にしていた。

④の熱河討伐写真画報・第二集が掲載した写真は次の通りである。i) 日満国旗を振って日本軍の入城を歓迎する朝陽市民、ii) 熱河省の省政府、承德入城の報に乾杯する関東

軍首脳部、iii)「通訳を志願して従軍した朝鮮少年、金振東（17歳）」と説明がある日の丸を手にした少年、iv)「歓迎の贈り物」との見出しが付いた日本軍兵士にひばりの入った鳥かごを差し出し歓迎の意を表す承德の少年一など。このほか、「日本軍隊はすべて良家の子弟で、国家のため、和平のために兵役の義務を果たす彼らは平和を乱す分子に対して非常に厳しいが、商人に対してはきちんと義理人情を重んじる。従って日本軍が歓迎されないところはない」と中国語で書かれた説明とともに、満洲国旗を掲げた商人からたばこを買ったり、日本国旗を背中にさした占領地区の子供を抱き上げる兵士が描かれた熱河作戦ポスターも掲載。満洲国建国1周年を祝う新京と東京の写真も10枚あり、この中には在東京の満洲国駐日公署前でちょうちん行列をする住民や、「国運飛騰 大同二年三月一日 慶祝建国周年記念」と題して、五族（日本、満洲、漢、朝鮮、蒙古の各民族）の代表と一緒に満洲国旗をデザインした大きな球を支える構図の記念ポスターを同公署内に張り出す館員が写っている。

⑤の「支那変乱の全貌」は、共産党討伐の督励に西安に赴いた蒋介石を張学良が監禁し、内戦停止と抗日を要求した、いわゆる西安事件（1936年12月）を「日支関係へはどう響く？」などの見出しを掲げ、写真と文章で分析している。

⑥の特集・支那戦線写真第十三報は「支那事変戦勝記念」発行とあり、日中全面戦争に突入し約5か月、河北、山西、綏遠の各省の戦線や上海戦線などを伝えると同時に、「武装移民の秋」との見出しで北部満洲の村で農耕牧畜に精を出す移民のルポを掲載している。

⑦の『問題の支那?』は、明治から昭和前期にかけての言語学者で中国通として知られた後藤朝太郎の著作。後藤は「支那風物誌」など多くの中国紹介書を書いている。

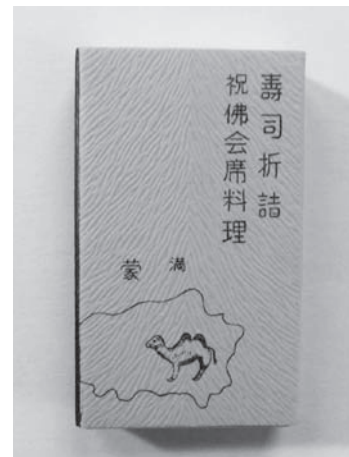


図3 満洲を描いたマッチ箱

4. 満洲のイメージ

4.1 祖父と父が抱いた満洲のイメージ

筆者の祖父が兵庫県で経営する鮮魚店に『満蒙』と命名したのは1935（昭和10）年。見つかった資料は命名の年の1935年を挟んで1931（満洲事変勃発）、1932（満洲国樹立直前）、1933（満洲国建国一周年直後）、1936（西安事件発生直後）、1937（日中戦争開始後）年に発行されている。昭和の初めから国内不況が続く中、満洲をとれば生活が楽になるという宣伝が信じられた（昭和ニュース事典編纂委員会1990）時代である。資料が伝える内容はその宣伝が次々と現実のものになっていく気分を国民の間に作り出したであ

ろう。

生前、父は「“満蒙”という名称には景気が良い印象があるので、商売が繁盛するだろうと思った」と祖父が命名した理由を語っていた。また母が祖父から聞いた話によると、“満蒙”は馴染みの客からの提案でもあったという。この年は満洲国の皇帝溥儀が訪日を実現した年でもある。5月2日、溥儀の来日を祝って、昭和天皇は日滿不可分の詔書を渙発した。1933年2月、「どこまで続く泥濘（ぬかるみ）ぞ 三日二夜を食もなく 雨降りしぶく鉄兜（かぶと）」と、満洲の戦線で戦う（匪賊を討つ）兵士たちの姿を歌った軍歌『討匪行』（関東軍宣撫班長・八木沼丈夫作詞、藤原義江作曲）がビクターからレコード発売されて、ヒットした。屋号命名の際、溥儀の訪日や『討匪行』のヒットに触発されたかどうかは定かではない。いずれにしろ、祖父たちが“満蒙”という語と、その響きに縁起の良さ、希望、商売繁盛などといった明るいイメージを抱いていたことは間違いない。

満洲国は、帰属する民族・身分によっては、複雑な政治的・社会的問題を抱えていた。これに対して日本人が抱くイメージはきわめてシンプルで、満洲に対して独善的で理想主義的な地域イメージを作り上げていた（貴志 2010 p.4）。保管されていたこれらの写真アルバムなどもこうした満洲のイメージを筆者の祖父や父を含め、内地の日本人に植え付けるうえで少なからぬ影響を与えたであろう。1960年代半ばにおいても、父は店の宣伝用マッチ箱を作る際、箱に満洲の地図と地図の中に一頭のラクダを描き、『満蒙』と屋号を入れた。

4.2 満洲にちなんだ屋号

筆者の実家以外で屋号に『満洲』あるいは『満蒙』という呼称を用いているところがあるか、インターネットで検索してみた。『満蒙』の呼称を屋号としているところはなかったが、『満洲』または満洲を意味する『満』の文字を使用したところは計5カ所あった。これらの店の関係者への電話インタビューで、命名の動機を聞いた。

①創業100年の山梨県の手彫り印鑑通販『日滿本店』。満洲国建国当時、『日滿水晶株式会社』として、営業拠点を現地にも設け溥儀をはじめ、満洲国政府の各大臣に印鑑を献上したという。のちに『日滿本店』と改称した。“日滿（にちまん）”は日本と満洲の頭文字をとった。②岐阜県郡上八幡の『満洲屋旅館』。1907（明治41）年、当時は建築業だった創業者が日本の“国策会社”南満洲鉄道株式会社（満鉄）関連の建設工事に加わるため、門司から大連、長春へ。さらに内蒙古の満洲里を経て、ロシアにも住んだ。1920（大正9）年郷里の郡上八幡に戻り、1922（大正11）年、「満洲屋」と称して、旅館をはじめ、今日に至る。③ラーメン店「満洲味」。創業者が満鉄関連の建設工事のために赴いたハルピン近辺で飲んだテールスープの味が印象に残り、引き揚げ後の1945（昭和20）年、そのスープをもとにラーメン店を始めた。④埼玉県の「ぎょうざの満洲」。現在の経営者の

兄が満洲からの復員兵で、満洲での生活が長かった。兄によく聞いた食べ物が餃子だった。⑤佐渡の鮮魚店『満洲屋』。祖父母が終戦で満洲から引き揚げ、佐渡佐和田町で鮮魚店『満洲屋』を開店。祖父母亡き後、2代目、3代目が現在インターネット通販で同じ屋号で営業している。

これらの屋号の命名に際して、創業者に共通していた感情は満洲への“郷愁”であった。郷愁が動機と考えられる。

5. おわりに

15年戦争と言われた日中戦争の引き金となった柳条湖事件が日本軍（関東軍）の謀略であったことを大多数の日本国民が知ったのは第二次世界大戦が終わってからだった。同事件から続く満洲事変に対して当時のジャーナリズム、とりわけ一般の日刊紙は真正面から批判しなかった（内川 1991 p.32）。事変後、言論に対する取り締まりが一段と厳しくなったため、満洲国の実相を内地の日本人が知る機会はほとんどなかった。筆者の実家で保管されていた写真グラフなども、厳しい言論・報道統制の下で発行されていたことを考えると、内地の一般の日本人の満洲に対する理解の度合いが単純で偏ったものになったとしても不思議ではない。

中国政府はいま、日本政府の尖閣諸島国有化を強く批判している。「甲午戦争（日清戦争）末期に中国から盗んだ歴史的事実は変えられない」「反ファシスト戦争勝利の結果を公然と否定するものである」（共同通信 2012・9）と言う。国有化反対デモでは「抵制日貨」（日本製品ボイコット）という、1910年代の排日、国権回復運動の際に用いられたスローガンが現れた。中国の強硬姿勢の背景には、日清戦争から張作霖爆殺事件、柳条湖事件、満洲事変、日本の傀儡国家・満洲国の建国、日中全面戦争へと続く一連の歴史の記憶に根差した怒りがある。

日本人の満洲への理解度を考察することは、中国の国民感情を理解することにもつながる。尖閣問題に関して中国政府の主張がたとえ牽強附会であるとしても、である。

〔注〕

- 1) 中国の東北一帯の俗称。もと民族名。現在、常用漢字の「州」を用いて「満州」と書くのが一般化しているが、ここで扱った資料や屋号では「満洲」と記されているため、本稿では満洲を用いる。

〔参考、引用文献〕

1. 江口圭一 2007 「満蒙問題」『世界大百科事典』平凡社 277
2. 新村出編 1986 『広辞苑第三版』岩波書店
3. 昭和ニュース事典編纂委員会 1990 「『昭和ニュース事典』発刊の趣旨」『昭和ニュース辞典 第1巻』毎日コミュニケーションズ
4. 内川芳美 1991 「満州事変とジャーナリズム」『昭和ニュース辞典 第3巻』毎日コミュニケーションズ 34-32
5. 貴志俊彦 2010 「満洲国のメディア戦略と弘報」『満洲国のビジュアル・メディア』吉川弘文館 59、4
6. 共同通信社 「尖閣『中国から盗んだ』」2012年9月28日配信
7. 共同通信社 「対立の本質見極めを 米ハーバード大のダニエル・シャピロ氏」2012年10月31日配信
8. 日満本店ホームページ <<http://www.interq.or.jp/ox/end/nichiman/sec.htm>> (2012/12/01アクセス)